

12) 骨盤出血の血管造影

道野慎太郎・竹井 亮二 (公立昭和病院)
桜井 賢二 (放射線科)

今回我々は骨盤領域の出血に対し、1988年9月から1989年8月までの1年間に経カテーテル的塞栓術を施行した6例を経験したので報告した。症例の内訳は、交通外傷2例、転落3例、術後1例で、塞栓術は各症例に対し左右内腸骨動脈を選択的あるいは更にカテーテルを進め造影し、出血所見を確認したのち、内腸骨動脈より2～3mmの Gelfoam 細片を用いて止血した。また Gelfoam 細片で止血困難な症例に対しては金属コイル使用又はバンプレシン持続動注を施行した。以上塞栓術を施行した6例は再出血及び塞栓部の合併症もなく、良好な経過をたどり、骨盤領域の塞栓術は有効であったと考えられる。

13) 経皮腎瘻造設例の検討

斎藤 明 (県立新発田病院放射線科)

14) 経皮的な大静脈フィルターの臨床経験

楠田 順子・是永 建雄
似鳥 俊明・藤川 隆夫
岡田 稔・蜂屋 順一
吉屋 儀郎 (杏林大学放射線科)

私達は、下肢および骨盤内静脈血栓症による肺塞栓症の再発、予防法として、Günther らにより開発された Seldinger 法によって経皮的に挿入可能な大静脈フィルターを用いて、肺塞栓症の発症、再発予防を行う機会を得たのでその手技と経過を報告する。

対象は、1988年1月から、1989年11月まで当院および関連病院において、Günther vena cava filter 挿入術を施行した8例で、肺塞栓症と診断されている4例と、予防目的のため挿入術を行った4例である。いずれも臨床症状および下肢静脈造影で、下肢静脈血栓症が認められている。年齢は22才から84才で、男性3名、女性5名であった。

挿入手技は、非常に容易かつ、確実であり、挿入後、最長1年9カ月の経過観察においても、肺塞栓症の発症、再発は認められず、経過は良好であった。肺塞栓症の予防法として、Günther vena cava filter は有効な手技と思われる。

15) 食道癌の脳転移

末山 博男・堀川 歩
滝沢 義和・中野 政雄 (琉球大学放射線科)

1984～1989年まで当科で治療した転移性脳腫瘍は43例で、その内訳は肺癌が21例、次いで食道癌が5例であった。食道癌脳転移の占める割合は11.6%で、他施設よりも高率であった。脳転移先行型が1例で、他は原発巣の治療開始から8～40カ月で出現した。初回脳転移はすべて単発であった。その治療は、手術単独が2例あったが、これはともに再発し、結局5例全例に放射線治療を施行した。効果は1例のみがPRで、他はすべてCRであった。脳転移からの生存期間は、1例が11カ月後に脳転移以外の転移で死亡したが、他の4例は3～24カ月生存している。

食道癌の脳転移に対する放射線治療は良好であり、手術を含めた集学的治療の中心となすものと考えられた。

16) 遠隔転移を伴う新鮮食道癌に対する照射前化学療法の検討

末山 博男・滝沢 義和
諸見里秀和・堀川 歩
中野 政雄 (琉球大学放射線科)

遠隔転移を有する食道癌新鮮症例8例を対象として、照射前化学療法を施行した。症例は全例男性で、年齢の中央値は59.5歳(51～67)、PSは0～4で1が多かった。組織型は全例扁平上皮癌であった。CDDP(80～90mg/m, day 1)、5-FU(800～900mg/m, day 2～6; 120時間持続静注)を3週間毎に繰り返し、1～5コース投与した。その結果、CR 2例、PR 2例、MR 1例、NR 1例で奏効率は75%と高率であった。副作用は消化器症状と骨髄障害であったが、重篤のものには遭遇しなかった。遠隔転移部位が制御された6例に放射線治療を行い、4例が完遂可能であった。最終治療後の評価はCR 4例、PR 2例、MR 1例、NR 1例であった。1年生存率は62.5%(5/8)、2年および3年生存率は25%(2/8)であった。この治療法は有効であり、生存期間の延長は著明であり、今後期待できる治療法と考えられる。

17) 新「障害防止法」に基づく非密封 RI 使用施設の設置経験

栢森 亮・西村 義孝 (新潟大学医療技術)
竹下 昭尚 (短大)

国際放射線防護委員会勧告(1977採択)により、我が